ラウレンティウスの解剖学書

澤井　直・坂井　建雄

日本医史学雑誌第五十一巻第一号　平成十六年十二月　九日受付
平成十七年三月二十日発行　平成十七年一月二十四日受理

〔要約〕アンドレアス・ラウレンティウスは『解剖学著作』（一五九三）と『解剖学誌』（一六〇〇）を書いた。両著作ともhistoriaとquaestioから構成されている。Historiaでは解剖によって明らかになる人体各部分の構造、作用、有用性が書かれている。Quaestioでは解剖だけでは明らかにならない当時未解決だった問題が扱われている。ラウレンティウスはそれらの問題に対して提出された多くの解決案を紹介し、もっとも好ましいと思われるものを示している。『解剖学著作』のほとんどのhistoriaとquaestioは『解剖学誌』にも収録されている。『解剖学誌』には特に靭帯、膜、血管、神経、腺などの人体を構成する部分についての新たなhistoriaとquaestioが付け加えられている。また『解剖学誌』には解剖学の記述も含まれており、解剖学史、解剖学の方法論、解剖学の有用性などの問題を詳細に分析している。『解剖学誌』を読むことで、解剖学において知られていること、まだ確定していないこと、解剖学とはどのような学問か、を知ることができたのである。これまでラウレンティウスの解剖学書は、オリジナルな見解が乏しいために重要視されてこなかった。しかし『解剖学誌』は十七世紀において人気のある解剖学書だったという事実は無視できない。このことから当時オリジナルな見解を紹介するのとは異なる種類の解剖学書、便覧としての解剖学書が求められていたことと窺える。今後、解剖学の専門家の知識が非専門家へとどのように伝わったかを考える上で『解剖学誌』は無視できない著作である。

キーワード――ラウレンティウス、解剖学書、知識の伝播

はじめに

アンドレアス・ラウレンティウス（Andreas Laurentius, またはAndré du Laurens, 1558-1609）は一六世紀末から一七世紀初頭にフランスで活躍した医学者である。[1] モンペリエ大学医学部で教職についた後、パリの宮廷で国王アンリ四世や王妃マリー・ド・メディシスの侍医を務め、モンペリエ大学の学長にも任命されるなど、その経歴は華々しい。その著作『神の恩寵によって敬虔なフランスの諸王にのみ許される瘤を癒す脅威の力について』（De mirabili strumas sanandi vi solis Galliae regibus christianissimis divinitus concessa, 1609）は侍医としての活動を物語っている。また『危機についての三書』（De crisis libri tres, 1605）や『視力の保存、メランコリックな病、カタル、老齢について』（Discours de la conservation de la vue; des maladies melancholiques; des catarrhes; et de la vieillesse, 1594）などの臨床関連の著作も残している。特に後者は非常に影響力のあった著作であり、各国語に訳されている。[2]

解剖学に関しては『解剖学著作』（Opera anatomica, 1593）と『解剖学誌』（Historia anatomica, 1600）を著した。特に『解剖学誌』は人気を博し、版を重ね、フランス語訳も作られた。ウィリアム・ハーヴィ（William Harvey, 1578-1657）も読者の一人であり、その研究活動にはラウレンティウスからの影響が指摘されている。[3]

ラウレンティウスの解剖学の著作は従来の歴史研究では取り上げられることは少なかった。[4] ラウレンティウスにはオリジナルな発見が乏しいために、新知見の発見を重視する歴史研究からは抜け落ちてしまっていたのである。そのため、多くの人に読まれたということは分かっていながら、その内容自体は明らかにされていない。

本稿では『解剖学著作』と『解剖学誌』を比較し、ラウレンティウスがどのような解剖学書を書いたかを明らかにす

る。『解剖学著作』の存在はこれまでほとんど知られていなかった。またラウレンティウスの解剖が言及される場合でも『解剖学誌』に触れられるだけで、『解剖学著作』についての考察はなされていない。[5]

特に注目するのは巻構成や記述の形式である。ラウレンティウスの著作の形式は当時のほかの解剖学書とは大きく異なっている。この独特の形式を持つことが彼の著作が広く読まれた要因の一つだと考えられるのである。

『解剖学著作』

『解剖学著作』は五巻からなり、腹・生殖器・胸・頭・四肢がそれぞれの巻で扱われている（**表1**）。ラウレンティウスによる人体の区分けは部位とその部位に属する器官の機能に基づいている。このような区分けは、生殖器が腹部内臓の巻で扱われているという違いがあるが、『モンディーノ解剖学』に見られ、後の解剖学書でも多く採用された。ラウレンティウスと同時代の解剖学書で、ラウレンティウスと同様に人気を博したバウヒン（Gaspard Bauhin, 1560-1624）による『解剖劇場』（Theatrum anatomicum, 1605）も腹・胸・頭・四肢の四巻からなっている。

ラウレンティウスの『解剖学著作』においては各巻にhistoria（記述）とquaestio（問題）と題された章が複数おかれている。Historiaでは人体の各部分の構造・機能などが記述され、胃についてのhistoriaや心臓についてのhistoriaなどがある。具体的には、ギリシア語の名称、ラテン語の名称、どのような物質から成り立っているか、形状、他の器官との連絡、出入りする血管・神経、その器官の働きなどが書かれている。

Quaestioはhistoriaの後に置かれ、historiaにおいて扱われた器官に関連した問題についての議論がなされている。例えば胃のhistoria[6]の後には「噴門は食欲の座なのか」というquaestioが置かれている。[7]ラウレンティウスはquaestioにおいて、その問題についての多くの人の意見を紹介し、最後に誰の意見がよいと思うかについて自分の見解を表明する。

表 1

『解剖学著作』		historia	quaestio
第一巻	ここでは栄養に従事する諸部分の historia が書かれ、またこの部分に関して見られる議論が説明される。	22	42
第二巻	ここでは生殖に従事する諸部分と胚の historia が詳細に記述され、次にこの部分について起こる議論が説明される。	16	39
第三巻	ここでは生命にかかわる部分、つまり脈、呼吸の器官が記述され、また医者の間で激しく議論された多くのことが説明される。	17	26
第四巻	ここでは動物的な、つまり脳と諸感覚の諸器官が記述される。	21	28
第五巻	ここでは四肢の historia とすべての骨の結合が記述される。	43	4

Historia と quaestio では扱われる内容の性格は異なっている。historia で扱われるのは解剖によって明らかな事柄であり、ラウレンティウスは確定した事実として historia を書いている。その内容はラウレンティウス自身が解剖によって見つけたものではなく、アリストテレスやガレノス、ヴェサリウスやコロンボ、ファロッピオらの解剖書の内容を編集したものである。[8] 一方 quaestio では historia の内容を踏まえ、古代の権威や近代の解剖学者の見解が多く紹介・引用しながら、観察のみでは明らかにならない生理学的な問題が議論されている。

ラウレンティウスの quaestio は、多数の異論を並べ、その判定を行っている点でアバーノのピエトロ（Pietro d'Abano, ca. 1257-ca. 1315）の『調停者』（Conciliator）と類似している。哲学と科学の宥和を目指した『調停者』では、特定の問題についてアリストテレス、ガレノス、アラビアの著作者らの見解が並べられ、ピエトロによって裁定が下される。ピエトロの『調停者』はガレノス主義者による医学教育においてよく用いられ、多くの版が出された。[9] 一六世紀においても用いられていたが、批判も多くなる。アルゲンテリオ（Giovanni

Argenterio, 1513-1572）はガレノス批判で知られているが、旧来のquaestioや『調停者』に基づく教育にも反対を唱えていた。ラウレンティウスのころにはそのような教育は下火になっていたが、完全になくなったわけではない。しかし、解剖学書においてquaestio形式が用いられるのは異例である。

ラウレンティウスはなぜ時代遅れとも言えるquaestioという形式を用いたのであろうか。ただ単に解剖学における人体各部の知識を伝えるためならば、historiaの部分だけで十分である。なぜquaestioという道具を持ち出してきたのだろうか。

この答えのヒントは『解剖学著作』の副題にある。この著作の正式な題は『学識ある医師であり、モンペリエにある国王の高貴なアカデミーに属する教授アンドレアス・ラウレンティウスによる五巻からなる解剖学著作』、副題は『この著作にはおのおのの部分のhistoriaが最初に記述され、次いでそのhistoriaにおいて見られた議論が詳述され、ヒッポクラテスの解剖書が説明され、また最近の人々による無数ともいえる不当な非難からガレノスが擁護される』である。この副題から『解剖学著作』は人体各部の知識を知らしめるほかに、ヒッポクラテスの解剖書の説明と、近代人からのガレノスの擁護をも目的としていることが分かる。ここでの近代人とはヴェサリウス、コロンボ、ファロッピオらといった解剖学者、またアルゲンテリオやフェルネルなどの医学者である。旧来のガレノスを権威として盲従する医学を打破し、新たな見解を生み出した解剖学者・医学者が、古代の権威に対置して批判されている。

ラウレンティウスが、近代の見解を反駁し、ガレノスの擁護を行うのはhistoriaではなくquaestioにおいてである。多くのquaestioではアリストテレス、ガレノス、アヴィセンナなどの古代の権威間での意見の相違を紹介・調停しているが、ヴェサリウス、ファロッピオ、コロンボの見解、あるいはアルゲンテリオの見解を反駁するという題を持つものもある。[10]

ガレノスへの異論が多数出されるようになった一六世紀末において、ガレノスを批判から護るためには誰か一人の意

見を採り上げての反駁だけでは効果はなく、ラウレンティウスはquaestioにおいて古今の異論を並べ、裁定を下すという形式を取ったのであろう。

『解剖学誌』

『解剖学誌』を紹介するにあたり、『解剖学著作』と比較しよう。『解剖学著作』と同じく、『解剖学誌』ではhistoria-quaestio形式が用いられ、ガレノスの見解が擁護されている。

『解剖学誌』と『解剖学著作』において巻の構成は大きく異なっている。『解剖学誌』の各巻では以下のような内容が扱われている。解剖学、骨、軟骨・靱帯・膜・毛、静脈・動脈・神経、肉・臓器・腺・筋肉、栄養器官、生殖器官、胚、肺・心臓、脳、感覚器、四肢。（表2）

『解剖学著作』が腹部器官、生殖器官、胸部器官、脳・感覚器、四肢の五巻からなるのと比べて、『解剖学誌』は一二巻からなっており、明らかに多くなっている。しかし『解剖学誌』は『解剖学著作』の生殖器官について巻を二分し、さらにいくつかの巻を加えたとも考えられる。あらたに加わったのは、最初の五つの巻である。体を構成する諸要素についての巻と解剖学についての巻が加わったのである。

このように巻の構成について『解剖学著作』と『解剖学誌』を比較した場合、『解剖学誌』は『解剖学著作』を改変し、大まかな部位に分けて人体を描くだけでなく、体を形作っている様々な組織についての情報を付け加えた解剖学書だと考えられる。

しかし、『解剖学著作』と『解剖学誌』では多くのhistoriaとquaestioが共通しているために、実際には『解剖学著作』と『解剖学誌』から得られる人体についての知識は全く同じものではないが、大きな違いはない。

『解剖学著作』において栄養器系を扱う第一巻には、二二のhistoriaが含まれる。そのうち導入として書かれた解剖学

表 2

『解剖学誌』		historia	quaestio	exercitatio
第一巻	ここでは人間の崇高さ、解剖の優位性・有用性・必要性、また解剖術の一般的な規則が説明される。	21	10	
第二巻	ここではすべての骨の historia が詳細に書かれ、また骨について起こる議論が説明される。	39	15	
第三巻	軟骨、靱帯、膜、毛について。	27		
第四巻	管について、つまり静脈と動脈と神経について。ここでは医者と哲学者の間の多くの議論が説明される。	20	12	6
第五巻	サルコーンについて、つまり内臓と腺と筋の肉について。	41	11	
第六巻	ここでは栄養に従事する諸部分の historia が書かれ、またこの部分に関して見られる議論が説明される。	25	31	
第七巻	ここでは生殖に従事する男性と女性の諸部分についての historia が先ず詳細に書かれ、次にこの部分について起こる議論が説明される。	12	13	
第八巻	ここでは胚の historia が詳細に書かれ、発生の原基、受胎産物、形成、生命、運動、最後に出産について、ヒッポクラテスの「知性について」に倣って、できる限り適切に説明される。	9	33	3
第九巻	ここでは生命にかかわる部分、つまり脈、呼吸の器官が記述され、また医者の間で激しく議論された多くのことが説明される。	17	26	
第十巻	ここでは霊魂的な器官、つまり脳とそこから生じるものについて記述される。	12	14	
第十一巻	ここでは感覚の器官が記述され、哲学者と医者の間の多くの議論が説明される。	18	12	
第十二巻	ここでは四肢の historia が書かれる。	10		

表 3　『解剖学著作』の historia の分配

			第一巻	第二巻	第三巻	第四巻	第五巻
			22	16	17	21	43
『解剖学誌』	計	新規					
第一巻	21	18	3				
第二巻	39	12			1**		24/26*
第三巻	27	27					
第四巻	20	18	1			1	
第五巻	41	25			1**	2/4*	10/11*
第六巻	25	4	18/21*				
第七巻	12	3		7/9*			
第八巻	9	0		9			
第九巻	17	0			15/17*		
第十巻	12	2				10	
第十一巻	18	12				6	
第十二巻	10	7					3
採用されなかった historia			0	0	1	2	6

*『解剖学誌』には『解剖学著作』の一つの historia を複数に分割した historia が存在する。斜線の左側は『解剖学著作』での historia の数、右側は『解剖学誌』での historia の数を表している。

**『解剖学著作』第三巻の historia XVI は『解剖学誌』第二巻 historia XXXIX と第五巻 historia XVII に分割されている。

一般の定義や人体の区分を扱った最初の三つは『解剖学誌』では第一巻に、腹部の動脈を扱った一つは第四巻に、腹部内臓を扱った残りの一八個は第六巻に収められている。他の巻でも同様に、『解剖学著作』では一つの巻に収められていた historia と quaestio が、『解剖学誌』では複数の巻に分散して収録されている。（表3、4）

一つの historia や quaestio が複数の historia の quaestio に分けられる場合や、『解剖学誌』では採用されない場合や、新たなものが付け加えられる場合もある。しかし『解剖学著作』の大部分の historia と quaestio は『解剖学誌』にも採用されていることが表から分かる。

以上のように『解剖学著作』の内容の大部分は『解剖学誌』にも盛り込まれているのである。しかし両著では、知識の提示の仕方が異なっている。『解剖学誌』では構成

表 4　『解剖学著作』の quaestio の分配

			第一巻	第二巻	第三巻	第四巻	第五巻
			42	39	26	28	4
『解剖学誌』	計	新規					
第一巻	10	4	6				
第二巻	15	9					4/6*
第三巻	0						
第四巻	12	6			1	5	
第五巻	11	4	3		4		
第六巻	31	1	28/30*				
第七巻	13	1		11/12*			
第八巻	33	5		27/28*			
第九巻	26	5			21		
第十巻	14	4				9/10*	
第十一巻	12					12	
第十二巻	0						
採用されなかった quaestio			5**	1	0	2	0

*表3と同様に斜線の左側は『解剖学著作』での quaestio の数、右側は『解剖学誌』での quaestio の数を表している。
**『解剖学著作』第一巻の quaestio XXIX の内容は『解剖学誌』では第四巻の exercitatio として収録されている

要素ごとに巻が立てられているのである。このような巻立ての解剖学書としてはヴェサリウスの『人体構造論』(De humani corporis fabrica, 1543) が有名である。

また『解剖学誌』各巻には『解剖学著作』にはなかった historia や quaestio が含まれている。特に『解剖学誌』の最初の五巻には『解剖学著作』に対応する historia, quaestio が見られないものが多く含まれている。元々『解剖学著作』では臓器に関しての記述が多く、血管や神経、腺などの扱いは小さかった。『解剖学誌』では血管、神経、腺を独立に扱い、『解剖学著作』においては扱われなかった軟骨・靱帯・膜・毛についての巻も設けられている。また『解剖学著作』では第一巻の最初に少しだけ扱われた解剖学そのものについての考察にも一つの巻が立てられている。

したがってこれらを扱った最初の五巻で

は『解剖学著作』になかった内容が盛り込まれるようになったのである。特に第四巻では『解剖学著作』ではほとんど記述のなかった神経と動脈の分布が細かに述べられている。しかし、historia が新たに導入されるだけで、quaestio が新たに加えられることはほとんどない。[11]

また第四巻と第八巻には historia と quaestio のほかに exercitatio（考察）という章が加えられている。これは quaestio の一種であり、一つの問題について詳細な検討を加えて、明確な結論を加えている。第四巻の exercitatio では静脈の起始はどこかという問題が扱われている。この問題についてのヒッポクラテス、アリストテレス、アリストテレス主義者、ガレノスの諸説、ヴェサリウスの意見が提示され、最後に肝臓が静脈の起始だと総括される。これらの内容は『解剖学著作』で静脈の起始を扱った quaestio を別の形で提示したものである。[12]『解剖学誌』では一連の六つの考察から静脈の起始についての問題が明快な議論を経て解決される。[13]その議論の厳密さにおいて quaestio とは一線を画す。

このように『解剖学誌』は『解剖学著作』と同じく historia-quaestio 形式を用い、人体を構成する脈管や肉などの構成要素についての内容を拡充し、新たな順序で人体構造とその問題を提示したものだといえるのである。

しかし『解剖学誌』では『解剖学著作』にまったくなかった情報が盛り込まれている。それは人体についての知識ではない。解剖学という学問についての知識である。

ラウレンティウスによる解剖学の分析

『解剖学誌』の第一巻は解剖学を扱っている。ここでは身体の部位や機能といった問題が扱われるのではなく、解剖学という学問そのものが分析される。この二一の historia には、人間とその身体の価値・特徴（Historia I-IV）、解剖の有用性（Historia V-VIII）、解剖学の提示・教育方法（Historia IX）、過去から現代までの解剖学の歴史（Historia

X-XIV）、解剖学の特徴（Historia XV）、解剖学の対象としての人体の部分についての考察（Historia XVI-XXI）が含まれる。これらのhistoriaにおいてラウレンティウスはさまざまな哲学者や医学者の言葉を引用しながら、解剖学についての自らの見解を述べている。またこの巻のquaestioはすべて部分についての問題に当てられ、『解剖学著作』で用いられたquaestioが流用されている。[14]（表5）

以下ではこれらのhistoriaを順に紹介してラウレンティウスが解剖学についてどのように考えていたかを明らかにする。

Historia I-IV

ラウレンティウスによれば、人間の神聖さは神に似た姿を持つことと霊魂を持つことに由来する。人間は他の動物の上に立ち、天使に次ぐ地位にある。それゆえ他の動物とは異なる特徴を肉体的にも与えられている。例えば豊かな表情の表出、二足歩行、頭部を保護する毛髪、脚と腕で屈曲方向が異なることなどである。

Historia V-VIII

解剖が有用な理由が挙げられている。それは、神の似姿としての人体を人間の最も鋭敏な感覚である視覚を使って知り、自らに与えられた栄誉を認識することにある。また人体の構造を知ることで神の御業を知ることにもつながり、解剖は有用である。それゆえ哲学者をはじめとするほとんどの職業に就く人々にとって解剖は有用である。医業に従事する医者、外科医、薬草家にとって人体の地図のような役割を果たすので、解剖学は有用であるだけでなく必須の知識でもある。

Historia IX

ラウレンティウスはここで解剖学の教授法と提示法を分析している。解剖学は観察（inspectio）と教授（doctrina）の二つの方法からなる。観察のほうがより確かな方法であるが、価値が高いのは教授のほうである。観察は人体・動

表 5 『解剖学誌』第一巻の内容

Historia I	人間の優位性がその諸部分から知られる。つまり霊魂と肉体から。また第一に魂の崇高さはどれほどか。
Historia II	人体の崇高さと構造はどれほどすばらしいものか。
Historia III	エピキュルス、モモス、プリニウスそして他の自然についての詭弁家が糾弾される。また人間の優位性がその裸体から示される。
Historia IV	人体は他の動物からどれほど隔たっているか。何が人体の構造に特徴的なのか。
Historia V	人体を知るために解剖がどれほど有用か。
Historia VI	神を知るために解剖がどれほど有用か。
Historia VII	解剖が哲学者やほぼすべての職業者にとって有用か。
Historia VIII	医者にとっては有用であるだけでなく、解剖は不可欠であることが示される。
Historia IX	解剖はどのような方法で教えられ、示されえるか。
Historia X	解剖の著者たち。また解剖についての最初の著者ヒッポクラテス。
Historia XI	解剖について書いたガレノス、また最近の人々によって悪し様にどれほど非難されているか。
Historia XII	アリストテレスが解剖についてどのように考えたか。
Historia XIII	他のギリシアの著作家たちが解剖について書き記したこと。
Historia XIV	我々の時代の解剖学の著者。
Historia XV	解剖とは何か、また幾重からなるか。
Historia XVI	解剖学の対象は何か。すなわち部分。ここでは部分の定義が説明される。
Historia XVII	任意の部分において解剖学者は何を見るべきか。
Historia XVIII	諸部分の相違：最初にヒッポクラテスの諸部分の区分。
Historia XIX	主要なものと下等なものへの諸部分の区分。
Historia XX	同質なものと非同質なものへの諸部分の正確な区分。またその詳細な理解。
Historia XXI	そのほかの諸部分の区分が説明される。
Quaestio I	諸部分の定義について。
Quaestio II	諸部分のうちの重要なものについて逍遥学派とは逆に、主要なものは一つ、つまり心臓だけではないことが示される。
Quaestio III	主要な部分はいくつあるのか。
Quaestio IV	どの部分が主要なもののうちでより卓越しているか。
Quaestio V	同質な部分と非同質な部分について。また最初にそれらの数について。
Quaestio VI	同質な部分は器官と呼ばれうるかどうか。また同質なものの作用は部分のものなのか、あるいは器官のものなのかどうか。
Quaestio VII	生殖の部分について、種子から生まれるのかどうか。
Quaestio VIII	生殖の部分は融合しうるのかどうか。
Quaestio IX	生殖の部分は肉質の部分より暖かいのかどうか。
Quaestio X	乾いた硬い部分は湿りうるのかどうか。

物・死体・生体に対して行われる。それらの観察結果に基づいて諸部分の目的因が文書や口頭で教授されるのである。

解剖において明らかにされるのは構造（structura）、作用（actio）、有用性（usus）の三つであり、これはガレノスの考えとして述べられている。[15]

生体解剖についての考察も行われている。ラウレンティウスによれば人体の生体解剖は必要がなく、動物で代用できる。生体解剖で分かるのは諸部分の作用であるが、これは人体と動物で共通することが多い。異なるのは運動器官の作用であり、これは生体解剖をしなくとも生身の人体から分かる。表からは見えない隠された部分である内臓の作用を理解する際に生体解剖が必要であるが、これは動物と人体で共通している。動物と人間では運動器官の構造には大きな差異があるが、内臓の構造には差異はなく、共通の作用が働いているのである。[16]

ラウレンティウスは解剖学の知見を提示する方法を分析的と統合的の二つに分類する。分析的な方法は人体全体を頭・胸・腹・四肢へと分け、さらにそこから細かく分けていくという方法である。逆に統合的な方法は、等質な部分から非等質な部分が作られ、非等質な部分からさらに大きな部分が、最終的に人体全体が組み立てられるように提示する方法である。ラウレンティウスが『解剖学誌』ではどちらの方法も用いられていると述べる。つまり二～五巻では脈管や肉などの人体を構成する要素（＝非等質な部分）が扱われ、それらの部分から頭・胸・腹・四肢などの大きな部分が作られることが書かれ、統合的な方法が用いられている。残る巻では人体全体を大きく頭・胸・腹・生殖器・四肢の部分に分けて、それぞれに含まれる器官について書かれ、分析的な方法が用いられている。

ラウレンティウスの分類を『解剖学著作』に当てはめると、この著作の巻立ては分析的な方法のみが用いられていることは明らかである。『解剖学著作』から『解剖学誌』への巻立ての変更は、内容の変更ではなく提示法の変更と考えられるのである。

Historia X-XIV

ここではヒッポクラテス、アリストテレスから現代までの解剖学者が挙げられている。特にガレノスについての多くの言及をしている。Historia IX で取り上げたように、ガレノスは諸部分を構造、作用、有用性の三つの点から記述しようとし、実際の著作にもその記述法が現れているとラウレンティウスは考えている。つまり『解剖学指南』(De anatomicis administrationibus)、『筋の解剖』(De musculorum sectione)、『神経の解剖』(De nervorum sectione) では構造、『自然の権能』(De facultatibus naturalibus) と『プラトンとヒッポクラテスの教説』(De placitis Hippocratis et Platonis) では作用、『諸部分の有用性』(De usu partium) では有用性が扱われている。ラウレンティウスは特に『諸部分の有用性』を高く評価し、それほどの著作を書いたガレノスに近年になって批判が加えられていることを嘆く。現代の解剖学者としてはヴェサリウスやコロンボなど一六世紀に活躍した解剖学者の名前が挙げられている。

ラウレンティウスは最後に自らの著作の方針を書いている。構造、作用、有用性に関する記述 (historia) の後に、それらに関する問題 (quaestio) を置くのである。[17]

Historia XV

ここでは解剖とは何かという問いに対して、ギリシア語の語源から「分けて切る」こととラウレンティウスは答える。しかし解剖はさらに観察したことの記述 (historia) と理論化 (scientia) からなっている。諸部分の構造について数、位置、形状、連絡などを記述し、その記述から理論化がなされ作用と有用性が知られるのである。

Historia XVI-XXI

ラウレンティウスは人体を構成する諸部分について考察している。アリストテレスやヒッポクラテスの物質論が論じられ、人体の区分についての議論が続く。ガレノスは脳・心臓・肝臓・生殖器とそれらに連絡する神経・動脈・静脈・輸精管、また骨・軟骨・靭帯・膜などを区別していたと書かれている。解剖学者の間で一般的な区分として紹介される

のは頭・胸・腹・四肢という分け方である。これは『解剖学著作』における区分である。『解剖学誌』の人体の構成要素に基づく巻構成はガレノスの人体区分を参考にしているようである。他には公的な部分と私的な部分に分けたフェルネルの意見も紹介されている。

『解剖学著作』と『解剖学誌』で巻構成が大きく異なるのは、人体の区分の面でもガレノスの考えを受け継ごうとしたことにも関係しているようである。

このようにラウレンティウスによる解剖学の分析は広範でかつ詳細なものである。当時の他の解剖学書においても、以上のような内容（特に人体の卓越性、解剖学の歴史）に触れられることはあった。しかしその場合は序文や緒言で簡単に触れられるだけで、[18] 独立した巻を設けた例は見られず、ラウレンティウスほどの詳細な分析も加えられていない。

この第一巻を読んだ読者は、解剖学で用いられる教授法・提示法・記述法や解剖の対象である人体とその部分についての分析から、解剖学という学問そのものについて理解を深めたはずである。そして二巻以降に書かれたhistoriaとquaestioから解剖学で現在分かっていることと未だ解決されていないこととを知ったはずである。ラウレンティウスは未解決の問題に関してガレノスの意見を尊重するが、他の意見も併記されているので読者は問題そのものとそれに対する複数の解決を知ることができる。こうして読者は解剖学についての広範な知識を手に入れることができるのである。

『解剖学著作』は人体について記述された著作だったが、『解剖学誌』では解剖学についての記述が加えられた。その結果、『解剖学誌』はまさに解剖学そのものが記述される解剖学のhistoriaとなっているのである。

ラウレンティウスの影響

ラウレンティウスの『解剖学誌』は多くの版を重ね、多くの人に読まれた。それ以前の解剖学書のような研究成果の発表としての著作ではなく、解剖学を紹介・解説する著作であったことから、専門外の人や初学者に有用だったのであろう。[19]

また解剖学の専門家によっても多く参照されている。アセッリ（Gaspare Aselli, 1581-1625）やマルピーギ（Marcello Malpighi, 1628-1694）などの一七世紀の多くの解剖学者がラウレンティウスの解剖・生理学的な内容に言及している。

ハーヴィのラウレンティウスの用い方は特徴的である。ハーヴィはラウレンティウスの見解について多くの言及を行っており、[20]他人の見解を紹介する際にラウレンティウスのテキストをそのまま借用する例も見られる。[21]これはラウレンティウスが quaestio において当該の問題についての異なる見解を多数紹介しているために可能なことである。他にも方法論の面でもハーヴィとラウレンティウスの間には関連が見られる。[22]ハーヴィは生体解剖を多く用いて諸部分の作用を論じるが、これはラウレンティウスの記述した方法を実践しているとも捉えられる。あるいは考察（exercitatio）という言葉の用い方などにおいてハーヴィにはラウレンティウスとの関連が見受けられる。

批判もなされている。リオラン（Jean Riolan Jr., 1580-1657）はラウレンティウスの著作の historia の部分における誤りを指摘する著作を書いた。[23]リオランは未解決の問題が多く、はっきりとした答えを与えられないことを理由に quaestio の部分には触れていない。コッラドは quaestio という形式そのものに対して批判を加えている。ラウレンティウスの quaestio には多くの人の意見が述べられているが、実際はどのようにでも取れる見解が並べてあるだけで、ラウレンティウスの示す裁定は言葉の上での裁定であると批判している。[24]

しかし出版後数十年経てもなお批判が加えられる点にもラウレンティウスの影響の強さが見受けられる。ヴェサリウス以降の解剖学の展開を追う際にラウレンティウスの影響力を避けて通ることはできないのである。

結　語

ラウレンティウスの頃にはヴェサリウス以来の多くの発見が積み重ねられ、また古代の権威と対立する意見が多く提出されていた。一六世紀後半の多くの解剖学者の著作には自らの発見と新見解が盛り込まれていたが、数が多くなるにしたがってすべての見解を把握することが困難となっていたであろう。また用語も統一されていなかった。そのため多くの解剖学書を手にとって比較・検討できる立場になければ当時の解剖学において何が確定された事実として知られているかを捉えることはできなかった。

ラウレンティウスの著作は以上の難点を解消している。自らの観察に基づくオリジナルな見解ではなく、多くの解剖学者の見解から人体を記述することで、当時人体について知られていたことを専門外の人にも伝えている。

またラウレンティウスにとって解剖学は観察によってすべてが明らかにされるようなものではなく、多くの問題が未解決のまま残されていた。[25] 彼の著作は、一つの著作の中に未解決の問題に対する多くの見解を盛り込むことで、当時の解剖学における見解の相違が分かるようになっている。多くの意見が乱立・対立する状況において、彼はそれらの意見を記述・調停し、解剖学における人体についての知識の現況を伝えようとしたのである。

『解剖学著作』の読者は、ハーヴィに見られるように、古代から近代までの解剖学の専門書を何冊も見比べることなく、解剖学の現状や人体についてどのような知識が明らかになったか、また何が未解決かを知ることができた。また解剖学という学問の性質・歴史・方法論を知ることができた。

ラウレンティウスの解剖学書はオリジナルな知見が乏しいために、これまでの歴史研究では取り上げられなかった。

しかし、他人の見解を豊富に紹介している点にこそラウレンティウスの著作の価値があり、多くの人に読まれたのである。そして、そのような著作が書かれ、広く読まれたということは、オリジナルな研究発表としての著作だけではなく、それらの研究を一般に紹介するような著作が求められるようになったという解剖学を取り巻く状況の変化を物語っている。

従来は、ヴェサリウス以降の解剖学を新発見の積み重ねから眺めてきた。方法論の面からヴェサリウス以降の解剖学が同質なものではなかったと結論する研究はあったが、[26] まだ一六世紀後半以降の解剖学の展開は明らかにされていない。ラウレンティウスの解剖学書は一六世紀末の解剖学という学問そのものの状況を記している点で今後の研究に多くの示唆を与えてくれる。また解剖学書が書かれ、読まれる状況の変化を物語る点で解剖学の展開を追うにあたって無視できない著作なのである。

謝　辞

本稿で用いた一次資料のうち、リオランとコッラドは倉敷中央病院のゲッチンゲン文庫に所蔵されているものを参照した。貴重な資料を閲覧させていただいたことに感謝する。

註

(1) ラウレンティウスの人生と業績に関しては以下を参照。Bylebil, J.: Laurens, André du. in Gillispie, CG. et. al. (ed.): Dictionary of Scientific Biography. Scribner, New York, 1970-80.

(2) Robert Burton の『メランコリーの解剖』(The Anatomy of Melancholy, 1621) への影響も指摘されている。Cf. Jobe, T.H.: Medical Theories of Melancholia in the Seventeenth and Early Eighteenth Centuries. Clio Medica. 11.4: 217-231, 1976.

（3）Wear, A.: William Harvey and the 'way of the anatomists'. History of Science. 21: 223-249. 1983.

（4）Gysel, C.: Morphologie Dento-Faciale et Scolastique dans l'oeuvre d'Andre du Laurens (1550-1609). Acta Orthopaedica Belgica. 31, 11: 53-64, 1976; Bylebyl, J.: Disputation and description in the renaissance pulse controversy. 223-245. in Wear, A. et al. (eds.) : The Medical Renaissance of the Sixteenth Century. Cambridge University Press, Cambridge, 1985.

（5）例外的にAdelmannはマルピーギの発生学を論じた著作において、マルピーギがラウレンティウスに言及する箇所で『解剖学著作』だけを参照している。しかしマルピーギが『解剖学誌』ではなく『解剖学著作』のみを読んだという証拠はあげられておらず、意図的に『解剖学著作』だけを取り上げたのではないようである。Adelmann, H. B.: Marcello Malpighi and the Evolution of Embryology. Cornell University Press, Ithaca, 1966.

（6）Laurentius: Opera anatomica. Lib. I, Historia. XV.

（7）Ibid.: Lib. I, Quaestio. XXV.

（8）ラウレンティウスは胎児についての観察は独自のもので、新たな発見もしたと述べている。Ibid.: Studioso lectori Andreas Laurentius sal.

（9）ピエトロの『調停者』とその影響については以下を参照。Lawn, B.: The Rise and Decline of the Scholastic 'Quaestio disputata'. E.J. Brill, Leiden. 1993; Maclean, I.: Logic, Signs and Naturs in the Renaissance. Cambridge University Press. Cambridge. 2001.

（10）e.g. Laurentius: Ibid. Lib. I, Quaestio IX ; Ibid. Lib. III. Quaestio VII.

（11）軟骨・靱帯・膜・毛を扱う第三巻にはquaestioはない。

（12）Ibid.: Lib. I. Quaestio XXIX.

（13）ハーヴィの著作の題でもexercitatioという言葉が用いられるが、明快な論理に従って一つの問題に解答が与えられる点でラウレンティウスと類似している。

（14）『解剖学著作』では「部分」を扱ったhistoriaとquaestioが第一巻にあった。これらだけが『解剖学誌』と『解剖学著

作』で共通している。

(15) 構造・作用・有用性から諸部分を論じるのは一六世紀の医学書においてよく見られる。構造（structura）の代わりに記述（historia）という言葉が用いられることも多い。

(16) この生体解剖についての考察は当時の生体解剖を理解するうえで重要である。当時多くの解剖学者が動物の生体解剖を行い、報告している。しかしハーヴィなどは動物から得られた知見を人体へと類推することについて批判を受けたりし、生体解剖から得られた知識はどこまで他の動物にもあてはめられるかについての問題が絶えず付きまとっていた。ラウレンティウスの考察を用いれば、外から隠された内臓の作用で、その構造が人体と動物で共通している場合に生体解剖から得られた知見は人体にも当てはまるのである。ヴェサリウスからハーヴィまでの人体解剖・動物解剖・生体解剖・死体解剖については以下を参照。澤井直「研究ノート　近代初期パドヴァ大学における解剖学の系譜」『ルネサンス研究』八巻、八八～一一〇頁、二〇〇一。

(17) 諸部分の定義について扱った第一巻の quaestio I の冒頭にも同様の方針が書いてある。ここでラウレンティウスは解剖学における未解決の難問を取り上げた解剖学書が少ないと指摘している。彼の著作の quaestio では、それまで取り上げられなかった難問が扱われているのである。

(18) e.g. Vesalius: De humani corporis fabrica. 1543.

(19) Bitbol-Hespériès, A.: Cartesian physiology. 349-382. in Gaukroger, S, Schuster, J and Sutton, J. (eds.): Descartes's Natural Philosophy. Routledge, London, 2000. Bylebyl によれば Helkiah Crooke の『小宇宙誌』(Mikrokosmographia, 1615) には『解剖学誌』の quaestio が収録されている。この著作はバウヒンの著作とラウレンティウスの『解剖学誌』を基にして書かれたようであるが、どの部分がラウレンティウスに依存しているかに関しては今後調査が必要である。cf. Bylebyl: Ibid.

(20) Whitteridge, G. (eds. & transl.): The Anatomical Lectures of William Harvey. E. & S. Livingstone, Edinburgh. 1964. にはハーヴィによるラウレンティウスについての多くの言及が見られる。

(21) Harvey, W.: Exercitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus, 1628. cap. 1. の冒頭。cf. Whitteridge,

G.: Willam Harvey and the Circulation of the Blood. Macdonald, London, 1971. p. 77, n. 6.

(22) Wear, A.: Ibid. において、ハーヴィが自らの血液循環の論証は議論に基づくものではなく解剖学の方法に則っていると考えていたことに対して、ラウレンティウスによる解剖の方法についての議論が援用されている。ラウレンティウスは前章で見たように解剖学は記述と理論化からなると考えているが、ハーヴィの血液循環は観察したものの記述と理論化を経て論証されており、ラウレンティウスの示した方法を踏襲している。

(23) Riolan, J. Jr.: Opuscula anatomica nova. 1649. Lib. Animadversiones in opus anatomicum Anadreae Laurenti.

(24) Collado, T.: Adversaria seu commentarii medicinales critici, diacritici, epanorthotici, exegematici, ac didactici. 1615. p. 3.

(25) サントリオ（Santorio Santorio, 1561-1636）は、「解剖が感覚知覚によってすべてを理解できるようなものならば、ラウレンティウス、またラウレンティウス以前にはヴェサリウスが考えたように多くの問題はなかっただろう」と述べている。Siraisi, N.G.: Avicenna in Renaissance Italy. Princeton University Press, Princeton. 1987. p. 328. から引用。

(26) Cunningham, A.: The anatomical renaissance: the resurrection of the anatomical projects of the ancients. Scolar Press, Aldershot, 1997.

（順天堂大学大学院医学研究科）

Laurentius on Anatomy

Tadashi SAWAI and Tatsuo SAKAI

Andreas Laurentius wrote *Opera anatomica* (1593) and *Historia anatomica* (1600). These books were composed of two types of chapters; 'historia' and 'quaestio'. His description is not original, but taken from other anatomists. 'Historia' describes the structure, action and usefulness of the body parts clarified after dissection. 'Quaestio' treats those questions which could not be solved only by dissection. Laurentius cited many previous contradicting interpretations to these questions, and choose a best interpretation for the individual questions. In most cases, Laurentius preferred Galen's view. *Historia anatomica* retained almost all the 'historia' and 'quaestio' from *Opera anatomica*, and added some new 'historia' and 'quaestio', especially in regard to the components of the body, such as ligaments, membranes, vessels, nerves and glands. Other new 'historia' and 'quaestio' in *Historia anatomica* concerned several topics on anatomy in general to comprehensively analyze the history of anatomy, methods of anatomy, and usefulness of anatomy. *Historia anatomica* reviewed what was anatomy by describing in 'historia' what was known and in 'quaestio' what was unresolved. Till now Laurentius's anatomical works have attracted little attention because his description contained few original findings and depended on previous books. However, the important fact that *Historia anatomica* was very popular in the 17th century tells us that people needed the non-original and handbook style of this textbook. *Historia anatomica* is important for further research on the propagation of anatomical knowledge from professional anatomists to non-professionals in the 17th century.